広報よりい800号記念特集

町広報誌を振り返る

町とあなたの かけはしとして

昭和30年5月12日に「寄居町公報」として創刊された町広報誌。創刊から66年を経過し、今月号で800号を迎えました。この間、町の行政情報や話題を掲載し続けてきました。

790号(令和3年6月発行)から「町広報誌を振り返る」と題し、過去の広報誌の中から、記事をピックアップして紹介するとともに町の歴史を振り返りました。今月号では、あらためて町広報誌がどのように変わり、何を伝えてきたのかを振り返ります。

問 総務課(☎581・2121内線314)

寄居町公報　第1号　昭和30年5月12日

「寄居町公報」第1号

創刊は町の誕生とともに

昭和30年5月12日に創刊した「寄居町公報」第1号。第6号までは「公報」と表記され、第7号(昭和30年11月発行)以降は「広報」と変更されています。印刷は当時主流の活版印刷が用られ、サイズはタブロイド判、創刊当初は不定期で発行されました。

第1号の内容としては、当時の町長である岩田周氏のあいさつをはじめ、4月の臨時議会の結果、円良田ダム完成の記事が掲載されています。当時の町長のあいさつの中には、町村合併の過渡期から町政も軌道に乗っていること、町村合併の際に議員が総辞職し、町議会の選挙が執り行われていることなどが述べられています。

役場の組織と人事の欄には、合併後の新寄居町の人事が昭和30年4月1日をもって発令されたとあります。その後の一カ月余りで第1号が発行され「寄居町公報」が新体制の中、新寄居町の誕生とともに創刊したことが分かります。

現代かなづかいへ

第11号(昭和31年3月発行)の編集室だよりには「新しい漢字とかなづかい」のコーナーを掲載。戦後、国語が著しく易しくなった反面、一般的にまだまだ難しい漢字が使われているとつづられています。

当時の編集者は「われわれは、1日も早く、こういう言語の欠陥を取り除いて、国民のひとりひとりが、容易に正しく、読み、書き、話し聞くことのできるようにわれわれのことばや文字を、やさしく、美しく、合理的なものにする努力を試みなければなりません」と誌面にて訴えました。この後、数号にわたり、現代かなづかいの要領が連載されています。

時代を映す生の歴史書として

昭和30～40年代には、小・中学校の校舎や上水道、国道140号バイパスなど、今では生活するうえで当たり前にある施設が次々と完成し、町広報誌では、その様子を写真と共に掲載しました。

第20号(昭和31年12月発行)では、町章の図案を決めるための審査会の様子を伝え、応募作品に対する委員の意見など、町章図案選定の過程が細かく記されています。

寄居町広報　第20号　昭和31年12月17日発行

「寄居町広報」第20号

新正喜橋の完工式(昭和32年)、当時の天皇・皇后両陛下をお迎えし、金尾・鉢形で開催された植樹祭(昭和34年)、寄居町が卓球の会場となった第22回国民体育大会(埼玉国体)(昭和42年)などの一大行事を町広報誌では特集しました。

第37号(昭和33年5月発行)に掲載の「単位統一まで半年　ヤード、ポンド法からメートル法へ」や第51号(昭和34年7月発行)に掲載の「待望の国民年金～十一月一日から実施」などの記事から、人々の生活が変化していく様子をうかがい知ることができます。町広報誌は町のあゆみを知るうえで、まさに「生の歴史書」といえるでしょう。

町広報誌の移り変わり

B5判になった201号

昭和47年5月1日発行の201号からは、B5判になりました。広報誌の名称も「寄居町広報」から「広報よりい」に変わり、表紙に写真を使用するようになりました。

296号からは2色刷りに

昭和55年4月3日発行の296号からは、2色刷りになりました。2色使うことで、明るく、そして読みやすくなりました。